

---

# キミのそばに居る理由

m a g n o l i a

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

キミのそばに居る理由

### 【Nコード】

N5670M

### 【作者名】

magnolia

### 【あらすじ】

千堂アキラは友人の高谷雪弥に片想いをしている。

雪弥は人気俳優、アキラは雪弥のマネージャーだったが。

## 変わり始める予感

キミのそばに居るためなら俺は永遠にこの気持ちを隠し続ける。

「アキ、邪魔だ」

仕事で疲れた一応客の俺に冷たく言うのは、小さな喫茶店の女店主。

「姫、俺、客なんだけど？」

「それが何だ？片付けの邪魔だ」

姫、本当の名前は美月だが、俺を含め美月と呼ぶ人間は少ない。

「姫、今夜泊めてくれないか」

「・・・雪弥と何かあったか」

姫は何でもお見通しと言うより俺がわかりやすいだけなんだろう。

姫は呆れた様子で俺を見た。

「彼女が出来た」

「あいつも相変わらず早いな」

高谷雪弥は人気俳優、俺は雪弥のマネージャーをしている。

雪弥とは長い付き合いの友人でもある。

「アイドルのカンナ今人気急上昇」

俺は雑誌を姫に見せた。

姫は雑誌を受け取り見つめる。

「雪弥の好きそうなタイプだな」

女の子らしい女の子ヒラヒラの服が似合う女の子は雪弥のタイプなのだ。

「ああ、本気なのかそうじゃ無いのか、俺、最近雪弥がわからないんだ」

長い付き合いの雪弥、何でも理解出来ると思ってた。

でも、最近の俺は雪弥が理解出来なくなってる。

前の彼女と別れて一週間、それなのに新しい彼女、最近雪弥は誰かと長く付き合う事が無くなった。

それは雪弥の自由なのかも知れないが、俺は誰かと雪弥が付き合い始める度に胸を締め付けられ、俺は表現出来ない不安と悲しみに襲われた。

「赤ワインが飲みたい、あとチーズ」

「姫」

「今夜は付き合ってる」

姫は雑誌を俺に渡しながら言った。

俺はずっと前から自分の気持ちに気付いてた。

しかし、それを認める事は出来なかった。

認める時、俺は雪弥のそばに今までの様に居る事は出来ないから。

「アキラ、おはよう」

「おはよう」

学生の頃から雪弥は何も変わらない。

俺に見せる笑顔も何も変わらない。

「疲れてる見たいだな」

「ああ、昨日姫と飲んでたから」

「何で俺も呼んでくれなかったんだ？」

「お前、昨日、カンナちゃんとデートだっただろ」

雪弥は不満そうに俺の顔を見てる。

「そうだけど、今度は呼んでくれよ」

「はいはい」

男の俺から見ても雪弥はカッコイイと思う。

でも、変わらない、まるで子供の様に笑い、拗ねる。

俺はそんな雪弥に俺は安心出来る。

「おはようございます」

俺がこの仕事を選んだのは雪弥のそばに居たと思ったから。

雪弥マネージャーになれたのは運が良かったとしか言えない。

三年、雪弥をそばで見っていた、それだけで満足だと思ってた。

「千堂さん」

「川村さん」

川村さんはカンナちゃんのマネージャー、見た目はおっとりとした感じの女性だ。

「カンナがお世話になってます」

「いいえ、カンナさんもお仕事ですか？」

「はい、隣のスタジオで雪弥さんが見えたのでカンナの代わりにお互いの事務所は二人の関係を認めない。

雪弥は人気俳優、カンナちゃんは今人気上昇中のアイドル、出来るだけスキャンダルは避けたいのだ。

「そうですか、伝言伝えましょうか？」

「お願いします、今夜またメールすると伝えて頂けますか？」

「伝えておきます」

俺は仕事だと割り切りたい、俺の感情は必要無いと。

「アキラ、今の」

「カンナちゃんのマネージャーさん、今夜メールするって」

俺は伝言を雪弥に伝えたと雪弥は無関心かのように椅子に座った。

俺は雪弥の横に立つ、俺は雪弥に何も聞かない、聞くのが怖いのだ。

「アキラ」

「なんだ」

「……なんでもない」

違和感、こんなの初めてだ、ずっとそばに居て、お互いに理解してたのに、最近俺は違和感を感じてた。

何かが変わる。

どんなに祈り願っても、変わる。

## 壊れる関係

「お前は どうしたい」

俺はまた姫に相談してる。

まるで女子高生の様な姿だ。

「それがわかれば姫に相談してない、でも、これ以上、雪弥のそばで今まで通りに振る舞う自信無い」

俺は本当に恋する乙女だ。

こんな事を考えたり、相談したりするなんて思いもなかった。

「情けないな、お前」

キツイな、でも、実際俺は情けない。

自信が無いなんって、自分が決めた事を俺は投げだそうとして居るのだから。

「本当、情けないよな・・・毎回、姫に相談して、また俺、逃げようとしてる・・・何も変わってない」

姫は俺の前にコーヒーを差し出した。

「変わっただろ、今のお前は考えてる、昔のお前は考える前に行動してたからな」

「姫」

変わることの無いモノなんて無いのかも知れない。

俺もそして、雪弥も。

「新人ですか？」

「Leiの担当だ」

今まで三年間、俺は雪弥のそばに居た。

（良い機会なのかもな）

変わるきっかけ、これは逃げる理由。

「はい」

Lei、歌唱力のある女性シンガー。

「担当が変わる・・・何で？」

雪弥は不満そうな顔をした。

「社長から言われた事だ」

「断わらなかったのか」

「社長に逆らう事は出来ない」

雪弥は下を向き何も言わずに黙って居た。

「雪弥担当は福原さんが引き継いでくれる」

「どうでもいい」

雪弥は後は何も言わずに部屋を出て行った。

俺は引き止める事も、名前を呼ぶ事も出来なかった。

「初めましてLeiです」

Leiは写真で見えるよりもキレイな女性だ。

「千堂アキラです、よろしく」

Leiはニツコリと笑顔を見せた。

「アキラさんはずっと高谷さんのマネージャーしてたんですね」

「三年してた」

あの日から三日、俺は雪弥と会う事も連絡をする事も無かった。

「アキラさん？」

「悪い、次行こうか」

今の俺はそれで良かった。

雪弥に会う事が怖かった、どんな顔をして会えば良いのか俺にはわからなかった。

もう、後戻りは出来ない。

どんなに足掻いても俺が決めた。

二度と戻る事はない、関係を壊したのは俺なのだから。

## 時間

「お疲れ様でした」

Leiのマネージャーになって一ヶ月、前よりは時間は出来た。

人気俳優の雪弥と比べてLeiはまだまだ新人、仕事の量も少ない。

「千堂さん」

「お疲れ、次、行こうか」

「はい」

今まで休みが欲しいと考えた事はあつたが、今は一人にならないように仕事ばかりして居る。

「千堂くん」

「沖田さん、お疲れ様です」

「お疲れ」

三年先輩の沖田さんは俺に仕事を教えてくれた人だ。

「雪弥、最近荒れてるな」

雪弥、もう一ヶ月以上連絡さえしていない。

「……最近、連絡とってないので」

「そうか、今月入って、マネージャー三回変わったらしいぞ」

「三回も」

沖田さんはタバコを口に咥えて俺を見た。

「お前が担当する前に戻った見たいだな」

俺が雪弥のマネージャーになる前の雪弥は問題児だった。

事務所も雪弥には手を焼いてたらしい。

雪弥は人気ある稼ぎ頭、事務所も雪弥のワガママに付き合ってた。

それは今も変わらない。

「そうですか」

「気になるか」

「……友人として、心配です」

友人、今の俺に雪弥のために何が出来る。



今の俺は雪弥の友人と呼べるだろうか。  
雪弥に何もしてやれず、俺は雪弥から逃げ出した。

「情けないな」

姫は相変わらず俺に冷たく言う。

「わかってます」

姫の前では怒られる子供の様になる。

「自分でわかってるなら、自分で考える」

姫に答えを求めてもダメな事ぐらい自分が一番知って居る。

なのに毎回、俺は姫に相談する。

「姫、雪弥は何を考えてるのかな」

「知らん、人の気持ち何て他人が知る事は出来ない、だから人間は面白い」

姫は何処か楽しそうに見えた。

「長く感じるんだ、今までより、ずっと、時間が長い」

俺は長く感じる時間、雪弥の事を考える。

どんなに考えても雪弥のそばに行く事も、俺には出来ない。

「会いたい、会えないと知りながら、考えてしまう」

俺は姫の言葉に驚いた。

姫は壁に飾られた写真を見つめて居た。

「姫、会いたいのか？」

「さあな、会いたいと願っても叶わん事もある」

叶わない気持ち、願う間の長い時間、俺はこんなのに悲しく、辛いのだとは知らなかった。

## 気持ち（雪弥の場合）

「雪弥くん」

退屈な日々、今の俺は最低最悪な奴だ。

「ここで降して」

「は、はい」

小さな喫茶店、ここへ来るのは久しぶりだ。

「珍しいな、雪弥」

姫は不機嫌な顔で俺の顔を見た。

「久しぶり姫」

「アキは今夜は来ないぞ」

姫は何でもお見通し、俺が今、アキラに会わず顔が無い事も。

「姫は何でもお見通しだな」

「残念ながらそうでも無い」

姫は俺の前に紅茶を差し出しながら俺に言った。

「アキラに会わせる顔なんて今の俺には無い」

会いたくない訳じゃない、会いたいと何度も考えた。

声が聞きたいと何度も思った。

でも、今の俺はアキラに会う事何って出来ない。

「情けないな」

「姫」

情けない、姫の言う通り、今の俺は最低で情けない。

今までの俺は来るモノ拒まず、去るもの追わず、だった。

それで良いと思ってた。

でも、アキラは違った。

そばに居て欲しい、俺を見て欲しい、こんな気持ちは今まで一度も

無かった。

「どうしたい？」

姫は真っ直ぐ俺の顔を見た。

たくさんの女優やアイドルに会って来たが姫はどの女性より綺麗で強い眼差しをして居る。

「わからない・・・こんなの初めてで、どうしたら良いのかわからない」

情けない、本当に情けない。

俺は今の俺が自分では無いように感じる。

「似てるな」

姫は口元に笑みを浮かべて呟いた。

「姫？」

「お前とアキは似たもの同士だ」

この気持ちは言葉に出来ない、伝える方法を俺は知らない。

「姫、俺はどうしたら良いのかな」

俺は姫に尋ねると姫は少し驚いた顔をした。

「アキに会いたいただけ？会ってどうする？」

会いたい、でも、会って俺は、アキラに何を言う。

今、この気持ちは自分でもわからないのに。

「自分の気持치가わからない、会いたいのに会うのが怖い、今のこの気持치가なんなのか」

姫は俺の頭を撫でた。

「考えろ、アキに会いたいと思う理由を、答えは簡単で難しい」

姫は答えを教えてはくれない、姫は俺の気持치의答えを知って居るのだろうか、簡単で難しいこの気持치의答えを。

## 行方不明

「千堂！」

それは突然だった。

「おはようございます」

「挨拶は後だ、会議室まで来い」

騒がしい事務所内、何かあった事は間違い無いだろう。

「沖田さん、何があったんですか？」

会議室には社長までもが居た。

「雪弥が行方不明なんだ」

「雪弥が・・・何か事件に」

俺は頭の中が真っ白になった。

俺は出来るだけ、普通に振る舞うようにと考えたが、上手く言葉が出ない。

「いや、マンションにこれが」

社長が取り出したのは一枚の紙。

「一人で考えたい事があります、探さないで下さい」

雪弥の字、俺は雪弥の悩みに気付いてやれなかった。

俺は悩んで居る雪弥から逃げ出し、連絡もなかった。

「姫」

「騒がしいな」

事務所に姫が来ることは年に数度、姫は不機嫌そうにあたりを見回した。

「雪弥は入院、椿総合病院特別室にて、病院の方は極秘にと伝える」

姫は大きく溜め息を吐いた。

「ありがとうございます」

「大木社長、兄から伝言、事を早急に解決し事の報告をするようにだそうだ」

「はい」

姫の実家は有名な財閥、姫は基本実家の仕事には興味は無いらしいが、たまに現総帥の兄の代行でたまに顔を見せる。

「姫」

「本当、お前たちは面白いな」

姫はこの大変な時に何故か楽しそうに見えた。

「雪弥の居場所、姫は知ってるのか」

「さあな」

姫は意味ありげな笑みを浮かべて俺を見た。

「姫、こんなに大変な時に」

「雪弥を見つけてやれ、あいつは今お前が必要なんだ、他の誰でもないお前がな、今度は逃げるなちゃんと向き合ってやれ」

姫はそう言って一枚の紙を俺に渡した。

「姫」

「お前たちをからかうのにも飽きた」

「ありがとう」

俺は紙を握り締め姫にお礼を言うと姫は手を振り帰って行った。

紙には住所と地図が書かれて居た。

「逃げない・・・もう終わらす」

俺は今まで逃げてた。

この気持ちは隠し続けると決めてた、雪弥のそばに居るために友人で居るために。

でも、限界だと感じて俺は逃げ出した。

雪弥のために、それは言い訳、本当は俺が傷つくのが怖かった。

雪弥に拒否され避けられるのが怖かった。

でも、もう逃げない、拒絶されても、もう、友人で居られ無くなっても、俺はもう逃げない。

## 一人の時間（雪弥の場合）

一人の時間がこんなにも長く感じるなんて忘れてた。

「無駄に広いな」

姫の持ち物の一つ、無駄に広い別荘。

- 昨日

「ここへ行け」

姫が紙と鍵を俺に差し出した。

「今から？」

「当然だ、お前、自分の気持ちに答え出たんだろ」

俺は気づいた、自分の気持ちに、この気持ちがなんなのか、会いたい、声が聞きたい、そばに居たい、単純で難しい、俺はアキラを好きなんだと気づいた。

でも、この気持ちをアキラに伝える事は出来ない。

拒絶されるのが怖い。

「姫」

「お前たちを見てるのは楽しいけど飽きた」

姫は不機嫌な顔で言うと言っ直ぐ俺を見た。

「お前、ちゃんとアキラと向き合え、逃げててもいつかは限界が来る、永遠に気持ちを隠し続ける事は出来ない」

永遠に、俺は、書置きを残して姫の別荘へとやって来た。

噂には聞いてた以上に大きな別荘はちゃんと管理され、ほこり一つ落ちていない。

「姫、本当にお嬢様なんだな」

小さな喫茶店の女店主から想像が出来ない、姫は名門財閥、山王寺

家の令嬢、家からは出たらしいがたまに家の仕事を手伝ってるらしい。

「姫、何考えてるのかな」

姫の考えは俺にはよくわからない、ただ、今は一人のこの時間が嬉しく感じる。

小学生の頃から子役として芸能界に生きてきた。

それは楽しかったし、辞めたいと思ったことは一度も無かった。

アキラと出会ったのは俺には新鮮な事だった。

俺はアキラと出会い、アキラが初めてだった、俺を一人の友人として見てとれたのは。

いつから、アキラに友人以上の感情を感じて居たのは、離れたくない、そばに居たい、こんなにアキラを好きになったのは。

どんな女の子と付き合っても俺はいつもアキラの事を考えてた、満たされない気持ち、満たされたくて俺は何人もの女の子と付き合ってた。

「馬鹿だよな・・・絶対に満たされる事はないのに」

俺はアキラだけで良い他に何も必要としない、この気持ちは大きい、伝える事は出来ない。

## 告白・重なる気持ち

山の中の静かな別荘地。

「さすが姫の別荘」

目の前に見える大きな別荘、姫の所有の別荘。

（ここに居るのか）

俺は緊張してる、不安も感じてる。

決心してこの場所へ来たのに。

「アキラ」

「雪弥」

一ヶ月、短い期間なのに、俺はまるで何年も会って居なかった様な感覚になった。

「・・・どうしてここに」

「姫が教えてくれた」

雪弥は俺の顔を見ない、それだけで俺は不安になった。

「・・・そうか・・・荷物、取ってくる」

俺は無意識に雪弥の腕を掴んで居た。

雪弥は何も言わず俺の掴んだ腕を見つめた。

「・・・聞いて欲しい事がある」

決めたんだ、俺はもうこの気持ちに決着をつけると。

それがどんな結果になっても。

雪弥は小さく頷いた。

「雪弥・・・ごめん、俺は、ちゃんとお前に向き合って無かった、逃げてたんだ」

俺は何から話していいかわからなかった。

もう、何年も雪弥に隠し続けてた気持ち、逃げ続けてた。

「アキラ」

今の俺は情けない顔をして居るんだろう、アキラを俺は真っ直ぐ見ることが出来ない。



「俺は・・・もう、友人で居られない」

「・・・どうして」

アキラが震えてる、掴んだままの手から震えてるのが伝わってくる。俺はまた、雪弥を傷つけた。

「もう、俺には、資格が無い・・・俺は」

言葉が出ない、この言葉を口にした瞬間、もう二度と雪弥のそばに居る事も出来ないのだから。

俺は怖かった。

「好きなんだ」

俺は自分の耳を疑った。

「・・・俺のそばに居て欲しい」

俺は雪弥を見た、雪弥は今にも泣き出しそうな顔をして俺を見て居た。

「雪弥」

「ごめん、気持ち悪いよな、男の俺にこんな事言われて・・・ごめん」

俺は雪弥の腕を引き寄せ抱きしめた。

言葉には出来ない感情が俺の中に溢れて。

「あ、きら」

「好きだ・・・ずっと前から」

何度も、雪弥に繰り返した。

雪弥は俺の言葉に何度も何度も頷いた。

「アキラ」

重なる、夢見た唇に触れて言葉に出来ない感情が伝わった。

## 新しい始まり

あれから一週間。

雪弥は次の日、社長にこれまで無いほどに怒られた。

そして、俺は雪弥の担当に戻された。

「雪弥をちゃんと監督してくれ」

俺たちは今までと何も変わらない。

友人では無くなったが、俺たちは今まで以上にお互いを理解しようとしてる。

「鬱陶しい」

姫に経過報告をするため、俺と雪弥は姫の店に来た。

「姫はどこまで予想してたんだ」

「さあな、人の気持ちを予想する事は出来ないから面白いんだろ」  
予想の出来ない気持ち、俺たちはこれからもお互いに理解しながら共に生きて行くのだろう。

喧嘩をすることもあるだろう、それでも、何年も俺の気持ちはきつと変わらない。

「アキラ」

まだ、始まったばかりの關係に俺は期待と不安を感じながら今日も雪弥のそばに居る

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5670m/>

---

キミのそばに居る理由

2010年10月10日21時18分発行